

今週のメニュー

[トピックス](#)

“エコプロダクツ2009”出展し、盛況のうちに終了！
- 環境配慮型展示ブースとして最終ノミネートに残る -

[随想](#)

10年一昔（連載33）

金沢工業大学・(独)科学技術振興機構 上野 潔

[編集後記](#)

トピックス

“エコプロダクツ2009”出展し、盛況のうちに終了！
- 環境配慮型展示ブースとして最終ノミネートに残る -

国内最大級の環境展示会エコプロダクツ2009（(社)産業環境管理協会、日本経済新聞社主催）が12月10日から12日までの3日間、東京ビッグサイト東ホールで開催されました。今年の出展者数は721社・団体、入場者数は昨年を上回る18.3万人と過去最大になりました。初日には、小沢環境大臣が視察され、記念シンポジウムでは、三菱総合研究所理事長の小宮山宏先生（前東京大学総長）が「課題先進国日本 - 低炭素社会への取り組み -」の演題で基調講演をされました。

今回のテーマは「問い直せ、日本の力 ソーシャルパワー元年」で、塩ビ工業・環境協会 / 塩化ビニル環境対策協議会も「身近なエコ素材、塩ビを知って、学んで、使おう！」をコンセプトに出展しました。

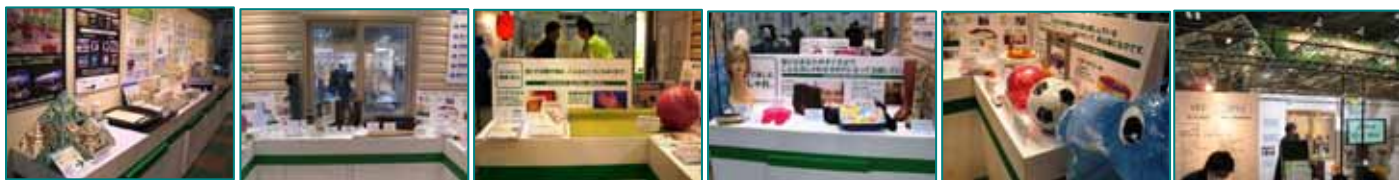
ブースは昨年より少し狭くなりましたが、種々の塩ビ製品の紹介とその環境優位性を訴えた展示ゾーンと、人気活弁士「坂本頼光」氏の電動紙芝居を行うステージゾーンに分けました。

展示ゾーンでは、従来の塩ビ製品の分け方と違ってポジティブに塩ビ製品を見て頂くために、「塩ビがプロデュースする快適生活」、「健康・安心」、「塩ビでおしゃれ」、「遊び心」などに分けて展示しました。リサイクル製品も、実際に活用されている製品展示とともに、リサイクル支援制度での成果も発表しました。塩ビ製品の展示とステージの上には、「フラクタル日除け」を全面に設置して、どこからでも眺められるように工夫しました。炎天下であれば、きっと、その日陰効果に驚かれたと思っています。

また、ステージの背景には、住宅分野のエコポイント対象となった樹脂窓を取付け、省エネによるCO2削減に貢献できる塩ビ建材の紹介を行いました。



展示ゾーン



リサイクル製品

快適空間

健康・安心

おしゃれ

遊び心

フラクタル日除け

[クリックで拡大](#)

ステージでは、小中学校の生徒やファミリー層の方を集めて、活弁士が一日6回のステージに立ち、「塩ビとの遭遇」と「未来の僕を救え」のふたつの演題で、ディスプレイに写した登場人物の声色を替えながら、環境授業と塩ビの環境性能の分かりやすい説明をされました。



ステージゾーン

これらのことが評価され、今回の展示は環境配慮型展示の表彰候補として最終ノミネートされた9つのブースの一つに入りました。残念ながら受賞は逃しましたが、業界としてのリサイクルへの取り組みや、環境問題への対応を分かりやすく伝えていることが評価されたものと思います。独自の環境配慮のポイントは、フラクタル日除け、タイルカーペット、壁紙などのリサイクル品で展示場を占めたことや、ブースの設営も再利用品やリース品を多用し、ステージも床面の延長で設置しないなどの工夫を行った結果と思います。

展示会の立会いには、塩化ビニル環境対策協議会、塩ビ工業・環境協会、樹脂サッシ普及促進委員会、樹脂サイディング普及促進委員会の会員会社・団体から、累計42名の方と、スタッフ9名が参加し、アンケートにお答え頂いただけで昨年を上回る6千人近い来訪の方々に対応されました。ステージへの案内、クイズチラシの答え探しへの協力、ノベルティーの交換などに大忙しでした。慣れない接客にはじめは堅かった表情も、やがてにこやかになり、専門外の質問にも、熱心に答えて頂きました。塩ビ製品の出展にもご協力頂いた多くの方々とともに感謝しています。

ブースに訪れた多くの方々が塩ビ製品の多種多様性ととも、環境への熱心な取り組みを理解して頂けたと思っています。企業関係の方からは、厳しい経済環境の中で、性能コストに優れる塩ビ製品をもっと使いたいので頑張ってもらいたいとの激励も頂きました。未だに偏見を受けている塩ビへの応援を頂いたことがこれからの活動の大きな後押しになります。

今回のエコプロダクツ2009に出展されていた企業・団体とも環境を通じた交流も行き、今後の活動に参考にしたい情報を多く得ることも出来ました。グリーン購入ネットワークはグリーン購入に取り組み、2900の企業・行政・民間団体が加盟する全国ネットワークで、当協会はその会員です。日本消費生活アドバイザー・コンサルタント協会(NACS)では、「商品選択につながる環境コミュニケーション」の事例として、携帯電話とレギュラーコ

ーヒーを取り上げて、分かりやすい展示をされていました。特に、エクアドルコーヒー園を実際に訪問した体験を踏まえての説明に迫力を感じました。日経新聞社の「日経環境授業&新聞づくり工房のブース」では、当協会が行った水戸市立双葉台小学校での出前授業の記事とビデオの紹介が行われました。

ほとんどの展示ブースで、塩ビへの偏見や忌避は見られませんでした。中には、塩ビ製品を使用しないことをエコと誤解して家電製品の競争を謳っている文言が見られたことは残念でした。本来は、製品そのものの性能・コスト・デザイン性で競争すべきものと思いますが、その中に環境性能に優れた塩ビ素材を巻き添えにしないで欲しいものです。



日経新聞社ブースでの
出前授業紹介ビデオ

最後に、環境問題に熱心な市民の方との出会いがあり、その集まりに招待されることになりました。見知らぬ人との出会いで、その輪が広がる機会が得られるこのエコプロダクツ展は貴重な集まりで、その出会いとこれまでの環境への取り組みを知らせる機会として、今後も参加して行きたいと考えています。(了)

随想

10年一昔(連載33)

金沢工業大学・(独)科学技術振興機構 上野 潔

1992年は第1回「環境と開発に関する国際連合会議」(通称リオデジャネイロ地球サミット)が開催された年です。環境に関するいろいろの規制や話題は、この時から始まったといっても過言ではありません。気候変動枠組条約(UNFCCC: United Nations Framework Convention on Climate Change)、生物の多様性に関する条約(CBD: Convention on Biological Diversity)、森林原則声明(The Declaration of Forest Principle)が採択されたのもこの会議です。2010年10月には名古屋で「生物多様性条約第10回締約国会議」(COP10)が開催されます。

環境について講演するとき、1992年に何をしていましたか?と必ず質問します。学生の場合は「その時諸君は何歳でしたか?」社会人の場合は「その時皆様はどんな仕事をしていましたか?」そして学識経験者の場合は「その時、先生は何を研究しておられましたか?」最後の場合は直接質問するのは失礼なので、研究論文や著書などを拝見します。

学生はまだ小学校の児童で、環境など家庭でも話題になっていなかったことでしょう。企業人はその時、恐らく環境以外の仕事をされていたのではなかったのではないのでしょうか? いまをときめく環境の学識経験者の大半はこの年を機に環境に研究テーマの舵を切ったのです。それを非難するつもりはありませんが、私は1992年以前から環境に係わっていた学識経験者を尊敬しています。

1992年から日本経団連(当時は経団連)所属の企業は次々と環境部門を設立しました。

その役割は従来の公害対策部門とは全く異なります。公害対策部門は、事業活動に伴う廃棄物や近隣地域・住民への騒音、振動、排水、悪臭、などへの対策が役割でした。これに対して環境部門の役割は、世界的に広まる環境規制や ISO で規定される環境監査に対応するための経営トップや事業部門のスタッフとしての仕事です。

古新聞や雑誌を話題にするようになると歳をとった証拠といわれそうですが、自宅の書庫を整理していたら、1999年4月号の「ニュートン臨時増刊号」が出てきました。「人体・環境異変 破局か再生か」という刺激的な特集号です。10年前の科学雑誌です。世界初の量産ハイブリッド専用車が日本で発売されたのも、「塩ビ NO」キャンペーンが日本で始まったのも1997年でした。IPCCの第3次報告が2001年、温暖化の数値予測した有名な第4次報告が2007年ですから、1999年は環境分野ではかなり古い時代です。

そのニュートン誌では、人体汚染の真実として「猛毒ダイオキシンが生殖障害や内分泌のかく乱障害を引き起こす」「われわれの周囲はすでに多種の環境ホルモンが存在している」「高まる環境ホルモンの危険性」などが、大変動する地球として「温暖化が日本の気候や生態系、私たちの健康をもおびやかす」「これまでにない速さと規模の絶滅が、私たちの目前でおきている」「大型台風や集中豪雨などが日本でも増大する可能性がある」「異常気象が増加する」など学識経験者の執筆が特集されています。

2010年の今、それらの内容をここで吟味するつもりはありませんが、予測がかなり当たっているもの、まったく見当違いのものまさに玉石混交です。

大昔の10年と、今の10年では科学技術進歩の速さが違うのかもしれませんが、「10年一昔」とは言えない科学技術の予測の難しさを感じます。

化学物質に関する記事はよくよく読むと決して断定せず、「考えられる」「ますます対策が重要である」など言質をとられない表現になっていて、当時の環境庁のデータを引用するなど信頼できるように書かれています。しかしそれは自身の研究結果ではなく引用です。そのため結果的に恐怖を煽っただけの科学記事のように感じます。これらの記事が更にマスコミに孫引きされ事実のように広まっていったのではないのでしょうか。環境ホルモンやダイオキシンなどに関して、その後明らかになった知見は10年後に著者からフォローされているのでしょうか。

地球温暖化についての記事は、国際協力によるデータを使用したシミュレーションであるためか、記述内容も決して断定的ではなく慎重です。この姿勢はIPCCの第4次報告書でも同じなのですが、世間の捉え方は結論を断定的に引用した論調が目立ちます。今から10年後の2020年は日本が国連で世界に温室効果ガスを1990年比で25%削減することを約束した年です。近々報告される第5次IPCC報告書の内容と、今論じられている対策がどのような結果になっているのか注目したいところです。

科学技術の役割は未知の事象を発見し、物理化学の現象を普遍的な原理で説明することだけではなく、未来を予測しその対策を提言することも含まれるのか？ 確かにハーシェルはニュートンやケプラーの理論と観測を基礎にして惑星の位置を予言しましたし、物理学者の湯川博士も素粒子論によって中間子の存在を予測したことは高校の物理で習いま

したが、地球温暖化や化学物質の危険性はこれらの予測と同じ範疇なのかなぁ？ 分かり易くマスコミの記事にすることも科学者の重要な責務ではあるけれど、などと 10 年前の古雑誌を見てあらためて考えるのです。(了)

前回の「海外からの環境研修生」(連載 3 2) は、下記からご覧頂けます。

http://www.vec.gr.jp/mag/249/mag_249.pdf

編集後記

この 10 年あまりの塩ビの置かれた状況の変化が、トピックスのエコプロ展と随想のニュートン増刊号のお話を比べると一目でわかり、10 年一昔を改めて実感しました。塩ビに関わってこられた先輩諸氏の努力に改めて感じ入りました。

このお正月休みに、話題の 3D 映画を初めて見ました。専用眼鏡が煩わしいものの臨場感はすばらしく、特にアクション場面ではその迫力に圧倒されました。この 3D がテレビでも実用化され 3 年後には販売されるテレビの 30% に達する可能性があるとのこと。我が家はようやくデジタル化したところなのに。この分野の変化もすばらしいですね。(可)

関連リンク

[メールマガジンバックナンバー](#)

[メールマガジン登録](#)

[メールマガジン解除](#)



編集責任者 事務局長 東 幸次

東京都中央区新川 1-4-1

TEL 03-3297-5601

FAX 03-3297-5783

URL <http://www.vec.gr.jp>

E-MAIL info@vec.gr.jp
